第7章

市史編纂事業

1901～2021

大阪市史稿本群

年	大阪市史編纂のうごき
1901(明治34)	大阪市会にて大阪史編纂の議案が可決、市役所に「大阪史編纂係」を設置
1911(明治44)	『大阪市史』第3巻を刊行(第1回配本)
1915(大正4)	『大阪市史』全5巻完結
1927(昭和2)	『明治大正大阪市史』編纂開始／編纂室を市役所庶務部に設置
1933(昭和8)	『明治大正大阪市史』刊行開始
1935(昭和10)	『明治大正大阪市史』全8巻完結
1948(昭和23)	『昭和大阪市史』編纂開始
1949(昭和24)	市役所行政局に「昭和大阪市史編纂室」を設置
1951(昭和26)	『昭和大阪市史』刊行開始
1954(昭和29)	『昭和大阪市史』全8巻完結
1958(昭和33)	『大阪市戦災復興誌』発刊
1961(昭和36)	『昭和大阪市史続編』編纂開始
1963(昭和38)	大阪市史編集室が行政局から教育委員会に移管、中央図書館市史編集室となる
1964(昭和39)	『昭和大阪市史続編』刊行開始
1967(昭和42)	『大阪編年史』刊行開始
1969(昭和44)	『昭和大阪市史続編』全8巻が完結
1979(昭和54)	市制100周年記念事業として『新修大阪市史』の編纂を開始／『大阪編年史』全27巻完結／市史編集室を「大阪市史編纂所」に改組
1988(昭和63)	『新修大阪市史』刊行開始
1996(平成8)	『新修大阪市史』全10巻完結／市史編纂所を中央図書館(新館)3階に移転
1999(平成11)	新修大阪市史の概説版『大阪市の歴史』刊行
2002(平成14)	大阪市史編纂所ホームページを開設／『大阪市史編集の100年』刊行
2003(平成15)	『新修大阪市史(史料編)』刊行開始(全22巻予定、刊行中)
2006(平成18)	『大阪市の歴史－まんが版－』刊行

大阪市における修史事業は 2021（令和 3）年で 120 周年を迎えました。

修史事業を担当する大阪市史編纂所は、組織上は中央図書館の一部署であると同時に、公共図書館に設置されているというメリットを生かして、大阪の歴史に関するレファレンスなど市民からの問合せへも日常的に対応しています。

修史事業の経過を詳しく、またエピソードも交えながらまとめたものが複数出版されています。

『大阪市史物語－20 世紀の軌跡－』（大阪文庫 11） 藤本篤・著 松籟社 1993（平成 5）年・刊

『大阪市史編集の 100 年』大阪市史編纂所・編 創元社 2002（平成 14）年・刊

詳しくはこれらの著作に譲るとして、本章では、市史編纂にかかる主な動きを、年代を追って記すこととします。

自治体における修史事業のはじまり

大阪市における市史編纂は、日本最初の自治体史編纂として、画期的な出来事とされています。初代の大阪史編纂主任である幸田成友（*）の文章を引用します。

> 市史の手本
>
> 市史といふものは在來日本に例のないものである。日本では官選の國史卽ち日本書紀を第一として六篇の國史があつて、總稱して六國史と言はれて居る。德川氏になつては幕府で編纂した御家記、寛政重修諸家譜のやうな類が色々ある。列藩では水戸家で作つた大日本史、是は光圀卿の時から始まり、（中略）尤も水戸家の大日本史編修は特別の例で、その他の大藩には大抵その藩の歴史又は地誌の類がある。地誌の類の方が多い。又歴史と申しても主として歴代の藩主の傳を集めたものといへる。右の次第で市史の手本とするものゝ無いのには甚だ當惑した。止むを得ず獨逸や伊太利の一二の市史を見て―ホンの垣覗をした丈故讀むとは申しません―少なからぬ教訓を得た。
>
> 大阪朝日新聞附録 1915（大正 4）年 8 月 1 日『大阪市史につきて』

＊ 幸田成友（こうだ・しげとも 1873（明治6）～1954（昭和29））。歴史学者。東京生まれ。幸田露伴の弟。大阪市からの要請を受けて1901（明治34）年に大阪史編纂主任に就任。以降、1914（大正3）年まで大阪市史編纂に関わる。

幸田成友

市史の編纂にあたって、これまでの日本には前例がなく、お手本がないので困った、といった内容ですが、ここに大阪市史が日本で最初の自治体史であることがわかります。

また、前掲『大阪市史物語』では、近年は記念事業（例えば市政 50 周年など）として修史事業が行われるのが通例であるが、大阪市史は何かを記念して作られたものではない、これがもう一つ画期的な点だ、と指摘しています。1901（明治 34）年 3 月 2 日の市会議事録によると、市史編纂を議決する直前の中谷徳恭議員（*）の発言は、「大阪市ニ完全ナル史書ナキカ爲往々面目ヲ失スルコトアルナリ且ツ年代ノ經過ト共ニ編纂ニ一層ノ困難ヲ生スヘケレハ今日ハ蓋シ好機ナラン」（大阪市に完全な歴史書がないために、将来的に（都市としての）面目を失うことがあるかもしれない。加えて、年を追うにしたがって編纂に困難が生じるのは必至で、今がまさしく好機であろう）、とあり、また、『大阪市史』第一の冒頭で、池上四郎市長は「今や本市實業上の權威東洋に加はり、其の我國運及び宇内の文化に負ふ責任愈重且つ新なるの時に當り、古今の沿革を研鑽して之を世に公にするは本市の職分にして、又其の面目を保全する所以なり」（今や大阪市の商工業その他における優位性は東洋諸地域に並ぶほどとなり、我が国の行く末、また世界の文化に対して負う責任はいよいよ重く、かつこれ

＊ 中谷徳恭（なかや・とっきょう 1851（嘉永4）～1922（大正11））。実業家、政治家。大阪市会議員、衆議院議員などを歴任。『大阪市史物語』によれば「若年のころから国史を学んで修史事業の難しさを熟知し、災害による資料の散逸・滅失等をたびたび経験した」。

までにないくらいになっている。そのような時に、現在に至る大阪市の移り変わりを研究して世の中に公にすること（市史を編纂すること）は、大阪市として当然なすべきことであり、またそれが都市としての面目を保つ方法なのである。（句読点追加））と記しています。

『大阪市史』から『昭和大阪市史』まで

こうして、大阪市会において大阪史編纂の議案が可決となり、1901（明治 34）年 5 月、現在の西区江之子島にあった市役所に「大阪史編纂係」を設置し、編纂をはじめました。編纂長である幸田成友のほか、合計 10 名は庶務部に属していました。1911（明治 44）年に第 1 巻を刊行、1915（大正 4）年に全五巻が完成しました。『大阪市史』は日本初の自治体史で、この原本となる稿本と推敲の過程を示す初校などの大阪市史関係の稿本群は 2015（平成 27）年 3 月 6 日付けで大阪市指定文化財に指定されました。

この『大阪市史』の記載内容は 1867（慶応 3）年までで終わっていたため、その続編である『明治大正大阪市史』を 1927（昭和 2）年から 1935（昭和 10）年までの間に編纂し、1935（昭和 10）年に全八巻の刊行を終えました。この編纂は庶務部に属し、事務を執る場としての編纂室が置かれ、そこに事務担当係員が常駐し、延べ 16 名の嘱託編纂員が週に何日か詰めるという形をとっていました。『大阪市史』編纂とあわせて、1928（昭和 3）年 10 月から「明治大正大阪市史紀要」を発行し、50 号まで刊行しました。

次の『昭和大阪市史』は、昭和初頭から終戦までを対象に、1948（昭和 23）年 5 月に編集の事務をはじめました。1949（昭和 24）年 9 月、昭和大阪市史編集室規定が制定され、昭和大阪市史編集室は行政局の所属として、市役所正面階段 2 階奥に置かれました。1951（昭和 26）年 7 月にまず概説編を刊行し、1954（昭和 29）年 3 月の付編をもって全八巻の刊行を終えました。事業中に、「昭和大阪市史紀要」を 1949（昭和 24）年 4 月から発行し、11 冊まで刊行しています。なお、昭和大阪市史編集室規定は 1952（昭和 27）年 3 月末に廃止となりました。

『昭和大阪市史』完成後の 1954（昭和 29）年 7 月からは、『大阪市戦災復興誌』編纂を開始し、1958（昭和 33）年 3 月に完成しました。

編纂事務を教育委員会に移管

次の『昭和大阪市史続編』は、1961（昭和 36）年 7 月に大阪市史編集室規程が制定され、行政局内に大阪市史編集室を設置し、編纂をはじめました。9 名の編集委員のほかに専任の室員はなく、室に関する庶務全般は行政調査課の職員が兼務していましたが、1962（昭和 37）年 8 月に専任の室員を採用しました。この『昭和大阪市史続編』編纂中に大阪市の機構改革が行われ、行政局が廃止となった際、市史編集室は教育委員会へ移管されることとなりました。1963（昭和 38）年 7 月 3 日、大阪市史編集室は中央図書館の中の課に相当する室として位置づけられ、それまで行政局行政調査課が行っていた庶務全般は中央図書館庶務課の職員が分担して行うこととなりました。

『昭和大阪市史続編』は 1964（昭和 39）年 3 月に第一巻概説編を刊行し、1969（昭和 44）年 3 月の第五巻経済編下および第八巻付編の刊行をもって完成しました。編集終了後も市史編集室は常設とし、絶えず将来の事業を予測しながら史資料の収集・整理・保存に努めることになりました。

この時期、『昭和大阪市史続編』に関する論稿や資料を掲載する目的で「大阪市史紀要」を創刊し、対象時期を限定せず、1963（昭和 38）年 1 月の第 1 号から、1978（昭和 53）年まで最終第 37 号を刊行しました。また、1966（昭和 41）年 4 月から、大阪市史編集にあたって収集した史料を集成する『大阪編年史』の編集にとりかかり、翌 1967（昭和 42）年から 1979（昭和 54）年までの間に全 27 巻を刊行しました。『昭和大阪市史続編』と『大阪編年史』と 2 つの事業が輻輳するため、1964（昭和 39）年 7 月に市史編集事務担当の主幹を置き、1965（昭和 40）年度から中央図書館長が市史編集所長を兼ね、1966（昭和 41）年度から中央図書館司書 1 名を応援として市史編集室での業務を行いました。さらにこの年の 10 月と 11 月に各 1 名の非常勤嘱託職員を採用し、6 名の体制としました。中央図書館長の兼務は 1976（昭和 51）年 4 月までで、以後は新たに嘱託の室長を置くことになりました。司書の応援は 1981（昭和 56）年 5 月まで続きました。

1972（昭和 47）年度からは大正期の労働調査報告全 50 輯の復刻に着手し、1975（昭和 50）年 3 月から 1981（昭和 56）年 10 月まで、『労働調査報告』全 14 巻を刊行しました。

『新修大阪市史』の編纂

1979（昭和 54）年 9 月、市政施行 100 周年記念事業として、改めて大阪市域を対象に古代から現代までの大阪市の歴史をあらゆる分野から編纂し直すため、『新修大阪市史』の編纂に取りかかりました。これに先立ち、同年 7 月に市史編集室を大阪市史編纂所に改組し、機構の整備を行いました。また、同月、学識経験者 4 名および教育長・総務局長からなる大阪市史編纂所運営委員会を開き、編纂方針を協議しました。これに基づいて、9 月 1 日に新修大阪市史編纂委員会が編纂委員 20 名で発足しました。

同じ年の 10 月、大阪市史料調査会が新しく発足し、大阪市に関する史料の調査・収集を専門に行うことになりました。また、大阪市の歴史に関連する刊行事業も行うことになりました。史料調査会には編纂所長、主幹（のち副所長）、主査が兼任し、専門の調査員を嘱託することとしました。調査員は、新修大阪市史の実務作業にも担当することになりました。

当初の計画では、1986（昭和 61）年から刊行を開始し、市政施行 100 周年である 1988（昭和 63）年度中に全 10 巻を刊行する予定でしたが、史料の散逸や執筆者間の調整、従前刊行資料の成果を踏まえて叙述するといった制約などの課題があったため、第一巻の刊行は 1988（昭和 63）年、最終巻の刊行は 1996（平成 8）年度となりました。1997（平成 9）年 4 月 19 日に本文編全 10 巻完成の記念講演を中央図書館 5 階大会議室にて行いました。

『新修大阪市史』の編纂事業が決まった際には、本文編のほか概説編および「重要史料を引き続き刊行」することとなっていましたが、編纂委員会は本文編編纂終了をもって解散し、本文編に対応する史料編は史料調査会に委託して刊行することになりました。これは、史料編の刊行が長期にわたること、調査員が経験を積んでいることが理由です。

なお、1984（昭和 59）年には、子ども向けに『大阪のあゆみ-市域の原始から現代まで-』を刊行しました。

史料編の刊行

1999（平成 11）年 3 月には、『新修大阪市史』をコンパクトに一冊にまとめ、中高生や一般市民にも読みやすく手軽に利用できる概説版『大阪市の歴史』を刊行しました。

2001（平成 13）年は修史事業 100 周年を記念して、11 月 24 日に記念式典、10 月 27 日から 11 月 29 日まで収集史料などの記念展示を中央図書館 1 階エントランスホールで行いました。また、記念誌『大阪市史編集の 100 年』を翌年に刊行しました。

2006（平成 18）年 10 月には、子どもも含めたより多くの市民に親しんでいただけるよう『大阪市の歴史―まんが版―』を刊行し、書店等で販売したほか、市立小学校・中学校・高等学校に配布しました。

『新修大阪市史（本文編）』刊行以後は『新修大阪市史（史料編）』（全 22 巻）の編纂に取り組み、2003（平成 15）年度に第 1 巻「考古資料編」を刊行しました。それ以降、1 年から 2 年に 1 巻のペースで刊行を続けています。

その他の刊行物、事業

1980（昭和 55）年 3 月から大阪市域を中心とした歴史に関する研究論文等を掲載する市史紀要「大阪の歴史」、市史・史料編には掲載しないが特色ある史料をまとまった分量で紹介する「大阪市史史料」を、年に 1～2 冊刊行しています。また、1998（平成 10）年 5 月から、大阪の歴史に関するさまざまな話題を親しみやすく紹介する「編纂所だより」を年数回発行しています。

また、市民や公的機関・報道機関などからの大阪市域の歴史に関する調査相談に応じるとともに、所蔵資料の閲覧・翻刻・掲載・展示などの利用に応じています。

大阪市史編纂所セミナー
2014（平成26）年3月

2003（平成 15）年 2 月には、市立図書館ホームページ内に「大阪市史編纂所ホームページ」を開設しました。

2004（平成 16）年度と 2005（平成 17）年度には、生涯学習ルーム事業と連携し、大阪市出前講座の一つとして講師を派遣しました。また、2013（平成 25）年 6 月から「大阪市史編纂所セミナー」を実施しています。『新修大阪市史（史料編）』の刊行に際しては、「史料でたどる「おおさか」講演会」を中央図書館で開催するとともに、関連企画展示を中央図書館 1 階エントランスホールのギャラリーや 3 階閲覧室で行っています。

教育委員会移管後の事務室等の変遷

1963（昭和 38）年 7 月に中央図書館（旧館）に移転した市史編集室は初め 3 階北西隅の小部屋、次に 2 階東側正面、そして 2 階東北角約 75 ㎡の事務室に落ち着きました。その後、中央図書館書庫が満杯に近づき、諸室を転用して書庫にする必要が出てきたため、市史編集室と児童図書室とあわせて、中央図書館に隣接する新しい建物（別館）に移転しました。

別館は、1979（昭和 54）年に着工、翌 1980（昭和 55）年 9 月末に竣工した 2 階建の建物で、同年 7 月に市史編集室から改称した市史編纂所はその 2 階、約 400 ㎡のスペースがあてられました。事務室のほか、会議室、作業室、書庫、貴重書庫を備えており、同月から本格的な編纂作業、史料調査収集整理作業が可能になりました。同年 11 月に移転をし、所長・主幹（1982（昭和 57）年 4 月から副所長）・主査の所員と応援職員（1981（昭和 56）年 5 月より事務職員）の 4 名が在席しました。のち、さらなる応援体制が組まれたほか、非常

勤嘱託職員を 3 名増員しました。

1988（昭和 63）年、中央図書館の南側に隣接して新たに大阪市公文書館が建設されました。中央図書館の建替が本格化し、別館も取り壊すこととなったため、翌 1989（平成元）年 3 月、市史編纂所は公文書館 2 階に移転しました。公文書館は総務局の所管ですが、編纂所は教育委員会の所管のままとしました。公文書館には、事務室、書庫、会議室（共用）、貴重書庫、写真室が用意されていましたが、作業スペースがなく、会議室や書庫の空きスペースを活用することもありました。

1996（平成 8）年に新しい中央図書館が完成し、市史編纂所は同年 3 月に再び中央図書館に移転し、今日に至ります。3 階部分の一角をスペースにあて、所長室、事務室、会議室、作業室、応接室、写真室を整備しました。書庫は、地下 3 階の一部をあてたほか、地下 4 階の貴重書庫に編纂所所蔵の貴重書も収納する等、施設面での充実を図ることができました。